



帰国生の日本再適応過程における「グローバル型能力」の変容：国内安住志向と国際移動志向への分岐

| | |
|-------------|--|
| 著者 | 額賀, 美紗子 |
| 雑誌名 | 国際教育評論 |
| 号 | 13 |
| ページ | 1-17 |
| 発行年 | 2016-03-31 |
| その他の言語のタイトル | Transformation of 'Global Competences' in Returnees' Re-adaptation Processes in Japan : Divergence of Orientation toward Local Settlement and Global Migration |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/148528 |

帰国生の日本再適応過程における 「グローバル型能力」の変容

— 国内安住志向と国際移動志向への分岐 —

Transformation of 'Global Competences' in Returnees' Re-adaptation Processes in Japan: Divergence of Orientation toward Local Settlement and Global Migration

額賀美紗子 (和光大学心理教育学科准教授)
Misako NUKAGA (Wako University)

<要約>

2000年代後半以降、日本国内ではグローバリゼーションがもたらす課題に際して「グローバル人材の育成」を求める議論が活性化し、帰国生を「グローバル人材」の予備軍と位置づける見方が示されている。本論文は帰国生がどのような「グローバル人材」に成長しようのかという課題を解明するため、「グローバル型能力」獲得を目標とした親のトランスナショナルな教育戦略のもと、海外生活を過ごした子どもたちの日本再適応過程を検討する。特に、海外で獲得した能力が日本再適応の過程でどのように変容し、大学生になった帰国生がどのような国際志向性をもってライフコースを形成しようとしているのかという点に注目する。

ロサンゼルスから帰国し、現在日本の難関私立大学に進学した4名に対する7年間にわたる複数回の追跡インタビューからは、再適応過程において「グローバル型能力」を伸長して国際移動志向が高まる場合と、「グローバル型能力」を矮小化して捉えて国内安住志向が高まる場合とに分岐することが明らかになった。「国内安住志向」の若者が海外で培った能力を「英語力しかない」と限定的に捉え、「グローバル型能力」が要求される国外に出ることを躊躇するのに対し、「国際移動志向」の若者は、英語力に矮小化されない自身の「グローバル型能力」に自信をもち、それを活用できるグローバルな場に移動することに意欲的であった。こうした分岐には、両者が再適応過程において、①日本の学校生活における「グローバル型能力」の矮小化、②トランスナショナルな経験を通じた「グローバル型能力」更新・伸長の機会獲得、という異なる水路づけをたどったことが影響している。

この結果からは、英語力の育成に特化したグローバル人材育成政策、それにもとづく学校教育のとりくみや入試の評価基準を再検討することや、初等中等教育において単身留学や諸外国の学校との交流の機会を多く設けることの重要性が示唆される。

*キーワード：帰国大学生、グローバル型能力、国際移動志向、トランスナショナルな経験、追跡調査

1. はじめに

2000年代後半以降、日本国内ではグローバル化がもたらす課題に際して「グローバル人材の育成」を求める議論が活性化している。2009年には経済産業省と文部科学省の連携による「グローバル人材育成委員会」が発足し、翌年の報告書『産学官でグローバル人材の育成を』（2010）においては「グローバル人材」に関して、「①社会人基礎力を備え、②外国語（英語）でのコミュニケーション能力をもち、③異文化理解・活用力を持つ者」という定義がされた。こうした議論の高まりの中で、初等中等教育段階において海外経験をもつ日本人の若者—いわゆる「帰国生」—を「グローバル人材」の予備軍と位置づける見方が示されている⁽¹⁾。2010年以降はグローバル人材政策の一貫として、帰国生の中学高校への中途編入枠拡大や、帰国生入試制度の改革、日本人学校・補習授業校など在外教育施設の拡充が提言されている。

帰国生に対するこうした社会的期待の高まりは、帰国生を日本の国際化の担い手と見なし、その「特性」を伸長することが教育的課題とされた1980年代から引き継がれている。たとえばグッドマン（1992）は、帰国生を「日本の国際化をリードする『新しい特権階級』」と位置付けたが、帰国生のあるべき「特性」を想定し、そのステレオタイプを通じて帰国生を画一的に扱うことへの批判もまた提起されてきた（佐藤 2001）。近年は日本企業のグローバルな進出に伴って海外に住む日本人の子どもたちの生活形態が一層多様化している。そのため、帰国生を「グローバル人材予備軍」とひとくくり語り、その能力に過大な期待をかけることは帰国生に対するステレオタイプを助長することになりかねないため、注意が必要である。一方で、地域や階層を限定した近年の事例研究においては、母親たちが子どもの「グローバル型能

力」を育成するために渡航前から日本帰国後の長期にわたってトランスナショナルな教育戦略に邁進することが明らかにされている（額賀 2013）。「グローバル人材」としての帰国生に対する社会的期待が高まるとともに、海外経験を利用して「グローバル型能力」を獲得・活用しようとする主体性が帰国生とその家族の間にみられるようになってきているのである。

本稿では額賀（2013）で対象となった子どもたちの追跡調査をもとに、海外で獲得した能力が日本再適応の過程でどのように変容し、大学生になった帰国生がどのような国際志向性をもってライフコースを形成しようとしているのかを検討する。その作業を通じて、帰国生が「グローバル型能力」を伸長し、グローバルな共生社会の実現に関わっていくために日本社会が取り組まねばならない教育的課題について考察したい。

2. 先行研究の検討

1980年代以降の研究蓄積の中で、帰国生には海外経験を通じて獲得した「特性」があることが指摘されており、海外子女教育の課題はそうした「特性」を伸長することとされてきた（佐藤 2001）。近年の研究においては、こうした帰国生の「特性」を、グローバルな文脈で高く評価される「グローバル型能力」と読み替える見方が提出されている。額賀（2013）は、ロサンゼルス在住の日本人家族の事例研究の中で、母親たちが日本国内外における子どもの地位達成を目的として、「英語力、広い視野、社交力、順応力、自己表現力」といった能力獲得に奔走していることを示した。また、子どもへのインタビューや現地校での観察を通じて、子どもたちが異質な他者との交流の中で、状況に応じて言語や態度、行動を切り替えたり、混淆する「順応力」や、異質な他者と対等な関係を築く「社交力」を形成していく過程に注目している。そ

して、こうした能力が、OECDの提唱するグローバル時代に必要な「キーコンピテンシー」や「グローバル人材政策」の中で提起されている能力と重なることから、それらを「グローバル型能力」と名付けた。「グローバル型能力」が帰国後も発揮されることによって、帰国生は日本の学校や社会を国際比較の見地から批判的にまなざし、異質な他者と共生する文化を新たに作っていく可能性があることが提起されている。

では、こうした帰国生の「グローバル型能力」は帰国後どのように変容していくのだろうか。先行研究では、日本の学校の同化圧力の中で帰国生のさまざまな「特性」がはぎとられたり、それを帰国生自らが放棄したりすることが指摘されてきた(巖谷 1986)。一方、帰国生受け入れ学級のある学校では、帰国中学生が既存の権力関係に抵抗するような批判的態度を提示することも明らかにされている(渋谷 2001)。また、帰国生の間には海外で獲得した能力を強く意識し、積極的に活用しようとする態度もみられるようになった。岡村(2008, 2011, 2013a)の一連の研究では、海外から帰国した中学生、高校生、大学生に質問紙調査やインタビューを行い、「海外経験を通じて得た特性」や「海外経験を活かす」ことに対する意識を尋ねている。その結果、帰国中学生の場合は「特性」を活かすことへの関心が低く、友人との親密な関係が学校満足度に影響を与えているのに対して、高校生と大学生は帰国生の「特性」を活用することに積極的であることが示唆されている。

また、岡村(2011)は、「自分の体験をある程度客観的にとらえ、意味付け、評価できるようになるのも、高校・大学段階に至ってからだろう」(p. 29)と述べており、帰国高校生・大学生を対象とした調査の必要性を提起している。特に大学時代は職業を選択し、ライフコースを

決定する重要な人生のステージである。帰国生が海外経験で獲得した「能力」をどのように活用してキャリア形成をしていくのかという問題を検討するうえで、大学生を対象とした調査は重要性を増している。

帰国生の「グローバル型能力」やライフコースと関わって、かれらの国際志向性に注目する研究も増えつつある。横田・小林ら(2013)は日本人大学生の国際志向性について調査し、帰国生を含む「長期滞在」者は海外留学や国際的な仕事に対する関心が「海外経験なし」「海外旅行のみ」の大学生に比べて高いことを報告している。一方、帰国生受け入れ校の高校生を対象とした竹田(2013)の調査では、帰国生の9割近くが海外就職に積極的であるが、異文化経験のない一般生に比して国際移動志向が強いという結果は得られなかったとしている。また、岡村(2013b)の帰国高校生対象の研究では、海外で仕事をすることを希望する「国際キャリア志向」と、国内での仕事を希望する「国内キャリア志向」の両者がみられることや、「特性」を活用する意識の高さが、キャリアに対する意識の高さに繋がっていることが指摘されている。これらの研究は、社会的期待に反して帰国生のキャリアやライフコースが必ずしも国際志向になるわけではないこと、そしてその選択には帰国生としての「特性」に対する自身の意識が関与していることを示唆している。しかし、帰国生の「特性」や「能力」が国際志向とどのように結びついているかという点については十分に明らかにされておらず、さらに検討の余地がある。

帰国生の「グローバル型能力」や国際志向性は帰国後の再適応過程の中で変容していくため、特定の帰国生を対象に継続的にその変化を追う追跡研究を実施するのが望ましい。小島(1987)は、追跡調査の利点として帰国生を受け入れる学校制度や日本の社会、文化の効果を長期的に

深く分析できることや、青年期の進路選択やアイデンティティ形成にまで踏み込んだ考察が可能になることを挙げている。同時に、同一の調査対象を複数回にわたって継続的に調査することは調査者と対象者のラポールの維持を要し、事例の収集が困難であることも指摘されている。このため、帰国生研究における長期の追跡調査はそれほど多くなく、海外滞在中から帰国後の大学入学以降までを継続的に追った調査は管見の限り非常に少ない⁽²⁾。

以上の先行研究の検討をふまえ、本研究では額賀（2013）で調査対象となったロサンゼルス在住の子どもたち4名を追跡調査し、以下の問いについて検討する。

- ①大学生になった時点において、帰国生はどのような国際移動志向をもっているのか。
- ②大学生になった時点において、帰国生は海外生活で得た自身の能力をどのように評価し、活用したいと思っているのか。
- ③帰国生の国際移動志向と海外で得た能力は、帰国後の生活の中でどのように変容していったのか。

3. 調査対象と方法

本稿で主な分析対象とするのは、筆者が2005年から2007年にかけてフィールドワークを行ったロサンゼルスから帰国し、日本の大学に進学した若者4名である⁽³⁾。対象者のプロフィールは次頁表に示した。4名の在外期間および帰国時年齢にはばらつきがみられるが、次のような共通点が挙げられる。①ロサンゼルス滞在中は国や人種に関わりなく広く友人関係を築き、現地の課外活動にも積極的に参加していた。補習校・塾を活用しながら日本の教科学習を継続する一方で、英語力を向上させて現地校になじみ、成績もよかった。②帰国後は帰国生枠を使って帰国生受け入れ校に入学した。③国内の難関私立大学に入学した（4名のうち3名

は同じ大学）。以上3点を概観するにすぎず、調査対象の4名は国内の学歴エリートとしての地位を獲得した、帰国生の「成功例」といえる。

筆者はこの4名に対して継続的に追跡調査を行っており、2007年以降、2回または3回にわたって2時間から3時間の半構造化インタビューを実施した。Dさん親子とは在外時から交流があったが、残りの3名は帰国後初めて接触した。Aさんの1回目インタビューは母親のみに対してだが、それ以外は母子同席のインタビューである。インタビューでは許可を得て録音し、文字起こしの上で質的データ分析ソフトのAtlas.tiを使用して分析を行った。

以下では帰国生4名について、かれらの国際移動志向と「グローバル型能力」を詳細にみていきたい。国際移動志向に関しては、「大学在学中や卒業後に留学をしたいか」「将来は海外で仕事をしたいか」という質問への回答にもとづいて、4名を「国内安住志向」と「国際移動志向」に分類した。また、能力に関しては、「海外に生活していたからこそ得られた能力はなにか」という質問を投げかけ、自由に回答してもらうとともに、筆者が設定した「グローバル型能力」の項目についても質問をした⁽⁴⁾。本稿では、「グローバル型能力」を検討するにあたり、英語力については公的な能力テストの点数をデータとして使用するが、その他の能力に関しては客観的測定法が存在しないため、インタビューをもとに帰国生自身の自己能力評価を分析対象とし、それを「能力」として扱う。また、「能力」が発揮されるためには、自己評価だけではなく、他者の評価も重要であり、本稿では母親の評価を補助的なデータとして取り上げる。

表 調査対象者のプロフィール

| | 年齢 性別 | 学年 | 在籍大学学部・入試形態 | 在外期間 | 在外年数 | 帰国時年齢 学年 | 帰国後の 受け入れ校 | 受け入れ校の 帰国生数（一 学年） | 受け入れ校の 帰国生対応 | インタビュー実施年月日 |
|-----|----------|------|--------------|--------------------------|--------|---------------|----------------------------------|-------------------------|---|--|
| Aさん | 20歳(男) | 大学1年 | A私立大学文学部（一般） | 2001～2004年 (K-3rd) | 2年11か月 | 9歳/ 小学3年生 | 公立小学校 ⇒私立中高 一貫校 (帰国枠入学) | 8名 (全体の3% 程度) | 英語の帰国生特別クラス (中1のみ) 英語の能力別クラス(中2以降) | ① 2007年8月(中学1年生)- 帰国後3年 ② 2014年9月(大学1年生)- 帰国後10年 |
| Bさん | 20歳(女) | 大学2年 | A私立大学文学部（推薦） | 1999～2007年 (PreK-7th) | 8年5か月 | 12歳/ 中学1年生 | 私立中高一貫校 (帰国枠入学) | 20名前後 (全体の10% 程度) | 英語の帰国生特別クラス (高校2年まで) 英語の進学先別クラス(高3) | ① 2007年7月(中学1年生)- 帰国後4か月 ② 2012年3月(高校2年生)- 帰国後5年 ③ 2014年8月(大学1年生)- 帰国後7年 |
| Cさん | 19歳(女) | 大学2年 | B私立大学国際系（推薦） | 2000～2005年 (K-5th) | 5年 | 10歳/ 小学5年生 | 私立小中高一貫校 (帰国枠編入) | 12名 (全体の10% 程度) | 国際学級(小学校のみ) 英語の能力別クラス (中学2年以降) | ① 2007年8月(中学1年生)- 帰国後2年 ② 2014年10月(大学2年生)- 帰国後9年 |
| Dさん | 19歳(男) | 大学1年 | A私立大学国際系(AO) | 2006～2012年 (3rd-9th) | 6年 | 16歳/ 高校1年生 | 私立高校 (帰国枠入学) | 160名前後 (全体の3分の2) | 日本語の特別補習クラス 英語の能力別クラス | ① 2007年3月(現地校4th) ② 2010年2月(現地校7th) ③ 2015年9月(大学1年生)- 帰国後3年 |

4. 「国内安住志向」の大学生たちの語り ——AさんとBさんの事例——

4.1 希薄な国際移動志向

まず、「国内安住志向」を示すAさんとBさんの語りを、大学志望理由や留学意思、将来展望から検討しよう。

ロサンゼルスに2年11か月滞在し、小学3年生の時に帰国したAさんは、将来世界史の高校教師になることを考えている。大学受験の際は英語力の増強を目的に国際系の学部も受験したが、最も進学したいのは世界史が専攻できる文学部だった。複数の大学に一般受験で合格し、最後は母親や塾の講師のすすめで「ブランド力があって、就職のとき有利な」大学に進学することを決めた。

Aさんに在学中の留学について尋ねると、「まったく考えてない」という返答が返ってきた。このAさんの意向に対してAさんの母は「ショックですね」と話し、留学についてAさんに勧める発言を繰り返した。

Aさん母：留学してほしいですね。

———そうですか。

Aさん母：すごくしてほしいんですけど、本人に勇気がないんでしょうね。

———（Aさんに向かって）そうなの？

Aさん：やっぱり、もう10年以上、長い間こっちにいたので、それもありますね。怖いっていう。安定を求めちゃうタイプなんで。

海外に出ることを「怖い」と感じるAさんは、海外旅行に関しても消極的な態度を示した。一時期海外に住んでみたい気はすると話したが、海外で仕事をしてみたいかという質問に対しては即座に否定の意思を示した。

国内での「安定」を求める志向はBさんにもまた顕著に表れた。ロサンゼルスに4歳か

ら8年5か月滞在し、中学1年生の時に帰国したBさんは、大学で都市社会学を学んでいる。将来は「人が気持ちよく生活できる空間をつくる仕事」に就きたいと話し、不動産やデベロッパーといった職業を検討中だという。在学中の長期留学や、海外就職の希望はまったくないと明言し、大学を決定する際にも、1年間の留学が必修になっている学部はあえて避けたと話す。海外に行きたくない理由について尋ねると、「移動することにもう疲れた」と返答した。

Bさん：（留学は）いいなあって思うんですけど、もう一回あの経験をやるのはいやだなって。（アメリカに）行ったときは楽しかったってことくらいで。日本に帰ってきた時が衝撃でした。

———移動がいやなの？

Bさん：うーん、新生活が……就職で何も居場所がない場所に行くっていうのが。知り合い一人もいない異国に。せっかく日本に来て落ち着いたのに。できるだけ今のこの生活を維持したいっていう。向上心みたいなのがないんですよ。

———今の生活に満足してるとか。

Bさん：そう、満足しちゃってるんですよ。

「あの経験」とBさんが指すのは、彼女が日本の中学校に入学した際、学習面や友人関係で大きな壁に当たったことである。彼女は難関私立校に帰国生枠で合格したが、入学後は日本の教科学習についていけず苦勞していた。国際移動は新しい土地で新しい人間関係を築き、受け入れられる努力を伴うことを彼女は身をもって知っている。現在の彼女はその苦勞を乗り越えて難関大学に進学するという希望を叶えたのであり、彼女にとって再度の国際移動は現在の充足した生活を脅かすリスクとしか映っていないことがうかがえる。

4.2 海外で獲得した能力の自己評価と活用意識

AさんとBさんの国際移動に対する消極的姿勢は、かれらが海外で培った自分の能力評価や活用意識と関連している。海外で獲得した能力について尋ねると、二人は即座に「英語」を挙げた一方、その他の「グローバル型能力」については「全然ない」と答えた。

Aさんは自分が海外生活で得た能力として、ネイティブの発音や英語への親近感を即座に挙げた。しかし、たとえば「多角的な視野」や「順応力」のような「グローバル型能力」については下記に示すように「全くない」と明言していた。

Aさん：もうほんとに、多角的な視野っていうのが全く頭の中に浮かんでこないんで。(…)
「海外」って言ったときに、思い当たる国があまり出てこないっていうか。

—なるほど。でも、世界史をやっていると国がいっぱい出てきますよね。

Aさん：ニュースを見ていたりとかしても、そんなにグローバルな視野っていうのはないかな。そういうような見方で考えないかなと思います。

—今、アメリカに行ったら、アメリカ的にストレートに物を言ったりとか、日本語から英語に流ちょうにスイッチするとか、できると思いますか。

Aさん：できないと思います。多分、日本人的な脳に切り替わってしまっているんで、そこから急に、あっちに行ったらあっちにシフトっていうのはできないと思います。

Aさんは帰国して10年の歳月が過ぎる中で、「日本人的な脳」に切り替わってしまったため、海外にまた行ってもうまく適応できないと考えている。また、Aさんは唯一海外生活で獲得した能力と考えている英語力に対しても強い自信

をもっているわけではない。彼のTOEIC点数は700点前後で、一般的には高いレベルであるものの、Aさんは「帰国の中だと良くないと思います」と言う。「英語を武器に大学に入った」と話すが、英語力を向上させる努力を特に続けてきたわけではない。

「グローバル型能力」に対する低い自己評価は、そうした能力の活用が求められる「グローバルな職種」から彼を遠ざけることにつながっていると考えられる。Aさんは帰国生の多くが海外生活の経験やそこで培った能力を「就職のチャンスに活かす」ことを認識しているが、自分は「(高校教師になりたいから)そういう必要はないんじゃないかな」と語っていた。もともと自分が選択して幼少期に海外生活を送ったわけではないから、帰国生が家族や社会から期待されるグローバルな方向性に無理やり自分を合わせる必要はないと考えている。

Bさんもまた、自分が海外で獲得した能力は「英語力だけ」と語る。彼女の場合は自分の高い英語力を自負しており、その唯一の点において「帰国生」ゆえの優越感を感じている。

Bさん：英語がないとほかの人と渡り歩けないんですよ。私は英語ができますっていうのだけに生きてきたんで。受験もそうですけど。英検一級持ってますとか、TOEIC975点ですって書けばそうなんだってなるんで。でもやっぱり強みではあるんで、そのくらいしかないんで。

—そのほかに強みは？

Bさん：ないですないです。

Bさんは、「英語ができればどこか(の大学が)拾ってくれる」と思って英語の勉強は帰国後もずっと熱心に取り組んできた。就職活動では英語力を売りにして他の学生に対して有利に立ちたいという気持ちを表明していたが、将来は英

語を使う職場を強く希望しているわけではない。

このように A さんも B さんも英語力が「帰国生」とそうでない者とを差異化する能力であり、それゆえに自身の卓越化を図る「武器」になりうることをよく理解していた。その一方で、英語力はあくまで国内の受験制度や就職活動において自らを有利な立場に置くための能力として捉えられ、国際移動の動機づけとして語られることはなかった。

4.3 国際移動志向と「グローバル型能力」の変容過程

では A さんと B さんの国際移動志向と「グローバル型能力」は帰国後の生活の中でどのような変容を遂げたのだろうか。

二人に共通していることは、帰国して数年間はアメリカに「戻りたい」という気持ちがあったものの、中学・高校の段階でその気持ちが失われていったことである。A さんが中学一年当時の母親インタビューでは、A さんが日本の学校になじめず、その反動でアメリカの生活を非常に懐かしみ、「帰りたい」と頻繁に口にしていることが語られていた。B さんの場合は、帰国後半年の時点で当時中学 1 年生だった本人にインタビューすることができたが、その際に彼女は「まだあっちが本当の家ってかんじ」と話して、ロサンゼルスに戻りたいという意識を強く表明した。二人は帰国生特別枠を使って中高一貫校に入学したが、教科学習や友人関係で悩み、日本の学校に再適応する過程で多くの葛藤を経験していた。その辛さがより一層海外に彼らの目を向けさせていたことが伺える。

しかし、この葛藤を多く孕む再適応過程の中で、二人の国際移動志向は後退していった。そのことは、かれらが自分の英語力に対する自信や英語への関心を失っていったことと関係している。高校 2 年生になった B さんをインタビューした際、彼女は中学 1 年生時とは違って、

アメリカの大学ではなく国内の難関大学に進学する意思を強く表した。筆者は彼女の変化に驚き、その理由を尋ねた。B さんは次のように回答した。

前に比べると英語力がすごく落ちてます。だからアメリカの大学に進学したいという気持ちは今はなくて。中学二年生くらいまではスタンフォードやバークレーに行きたいと思っていたし、周りにもそう言っていたんだけど、中学 3 年くらいで変わってきちゃいました。日本語ができるようになって、英語が落ちてきたころ。担任の先生にもアメリカを薦められたんだけど、そういう気持ちはなくなっちゃって。

B さんは英語力が落ちる一方で日本語力が高まり、日本の学校生活が「落ち着いてきた」と語った。ロサンゼルス友人との連絡頻度も減り、日本の友人たちとの交友が中心になってきた。こうした変化に伴って、アメリカの大学への進学意欲も減退していったことが伺える。

A さんの場合は、高校時代に英語への関心が徐々になくなり、アメリカの生活を懐かしんだり、海外に行きたいと思ったりすることもなくなった。その理由として、英語が以前ほど流暢に話せなくなったことに加えて、高校二年生まではあったネイティブによる会話中心の授業が三年生ではなくなり、大学受験を目的とした講義形式の授業に変わったことを挙げていた。

英語力以外の「グローバル型能力」の変化について尋ねると、本人や母親は英語力以上になくなっていったという認識でいた。A さんの母親は中学 1 年生当時のインタビューで、A さんがアメリカでは非常に明るく目立つ存在で、出身国に関わらずだれとでも分け隔てなく仲良くできる力や視野の広さを身に着けたことを嬉しそうに語っていた。しかし、直近のインタビューでは次のように語った。

ほんとに3年間をアメリカという所で過ごしたので、帰ってきたときに四方八方に自由に伸びちゃったところを、こういうふうに抑えて抑えてっていうのが、帰国してから大変だったんです。あんまり抑え過ぎも大変だとは思いましたが、でも結局、中学高校の6年間が勉強勉強の毎日だったので、ほんとに急転直下、全然違う環境の中に入って、見ていてかわいそうでした。そのせいでいろいろな面で視野がすごく狭くなっちゃったんだと思うんですね。

上記の「勉強勉強の毎日」という語りからもわかるように、Aさんの学校は大学進学実績を重視し、勉学に非常に力を入れていた。Bさんもまた有名中高一貫校に通い、「うちの学校では早慶上智は当たり前だと思っている」と話していた。国内の大学受験に主眼を置く学校文化の中で、積極的に評価されたり、活用されたりする「グローバル型能力」は英語力のみであり、「視野の広さ」や「社交力」「順応力」といった力は看過される傾向にある。

「グローバル型能力」低下の認識は、「日本人化」の意識向上と連動していることも推察される。帰国直後のインタビューの中で、Bさんはアメリカの学校経験から日本の学校を相対化したり、またその逆を行ったりする発言をしており、多角的な視野を持っていたことが伺えた。だが、直近のインタビューでBさんは筆者と会うなり、中学1年生時の自分の発言に触れながら、「もう今はあんなに面白いこと言えません。日本人になっちゃったから」と切り出した。こうした「日本人化」の語りはAさんにも見られた。彼は、「順調に日本人になってきている」と話し、「いろんなことを考えずに済むので、慣れちゃったほうが、一体化したほうが楽かなみたいな、そういう感じです」とも言っていた。「グローバル型能力」は自己の卓越

化をはかるための資源となりうるが、それは「日本人化」による居心地の良さやひきかえにしか維持・活用できないものであると二人は考えるようになっている。その二項対立図式の中でこれらは「グローバル型能力」の伸長ではなく、「日本人化」による日々の安寧に充足感を覚えているのである。

5. 「国際移動志向」の大学生たちの語り ——CさんとDさんの事例——

5.1 強い国際移動志向

前節で検討したAさんとBさんとは対照的に国際移動に対する強い積極性を見せたのがCさんとDさんである。

Cさんは6歳から5年間をロサンゼルスで過ごした後、小学校5年生で帰国し、私立の帰国生受け入れ校に編入した。その後、高校一年生のときに留学制度を利用して米ミズーリ州の高校で1年間学んだ後、推薦入試で第一希望の私立大学国際系学部合格した。Cさんは大学生活に満足しているが、「今のうちしかできないから違う経験をまたしてみたい」と話し、在学中に今度はアメリカ以外の国に留学することを検討している。

——高校生の留学のときはアメリカ以外は嫌だったと言ってたけど、今度の留学もアメリカを考えている？

Cさん：いや、今はアメリカは行きたくないかな。違う所に行ってみたいって。なんか今、そのAFSのボランティアをやっていて、これから留学に行く子たちのオリエンテーションとかを、企画みたいなのをやっていて、今一緒にやっている留学に行っていた人たちはアメリカじゃない国が結構多くて。で、みんな楽しそうな経験をしているから、いいなみたいな。

国際移動に対する積極的な姿勢は将来展望を聞いた際にもみられた。まだ具体的に就きたい職業は決まっていないが、「基本、日本でたまた海外で仕事するのがいいかなって」と話した。短期の海外出張だけではなく、数年間、海外で仕事をするということにも意欲的であった。

Dさんは、国際移動に対してCさんよりもさらに積極的な姿勢を見せた。彼は小学校3年生の時からロサンゼルスに6年間滞在した後、中学3年生の終わりに帰国し、帰国生受け入れ高校に入学した。生徒会長を務めて楽しく活動的な高校生活を送ったが、大学進学先を決める際は「とにかく向こうの環境にいたかった」という思いから、アメリカの大学も想定してSATの勉強もしていた。しかし金銭的な問題から断念せざるをえず、海外経験や高校の活動実績が重視される国内のAO入試に的を絞り、英語力を活かせるA大学の国際系学部を第一志望にして合格した。

Dさんは自分が住んでいたアメリカ西海岸の大学に強い魅力を感じており、在学中に大学の交換留学制度を利用して1年間カリフォルニア大学の系列校で学ぶことを希望している。大学卒業後はアメリカの大学院でビジネスを学ぶことを検討中だ。高校2年生の時に予備校を通じてスタンフォード大学の授業体験プログラムに参加した経験があり、その時に親しくなった日系アメリカ人の教授に大学院進学に関して相談をしているという。

スタンフォードの教授にも、もともと相談していたんです。「やっぱりアメリカの大学に来るなら大学で行くより大学院できた方がいいよ」と言われて、じゃあもう行くしかないなと思って。できればそのまま就職できたらいいな。

彼はアメリカに定住することを強く希望しているわけではなく、「1か所にはいたくない。

常にどっかに移動していきたい」と語っている。Cさんが日本を拠点に国際移動を展望しているのに対して、Dさんは日本に住むことにこだわらず、グローバルな移動を志向しているのが特徴的である。

5.2 海外で獲得した能力の自己評価と活用意識

海外で獲得した能力について質問した際、CさんとDさんに共通していたのは、英語力のみならず、それ以外の能力を強調して詳細に説明した点である。

Cさんは、家族駐在と高校留学を通じて自身の英語力が順調に向上していることを自覚していた。彼女は英検1級とTOEFL115点を取得し、英語で行われる大学の授業や、ネイティブの留学生や帰国生との英語会話にもなら困難を感じていない。

海外生活で獲得した能力はなにかと尋ねたところ、Cさんはまず、「ロスの四年間があったからこそ、(高校で)留学に行くことにそんなに抵抗がなかった」「(海外でも)なんとかなる精神が強い」と話した。これに関連して、彼女の母も「ハートが強くなったんじゃないかなと思います」と話していた。こうした心持ちは国際移動に伴うリスク不安を軽減させ、むしろ移動先での新しい生活に対して前向きになることを促している。

また、Cさんは高校時の留学を通じて、「いろいろな考え方を受け入れる」姿勢や「視野の広さ」を獲得したとも話した。

—留学を通して何か変わったことがある？

Cさん：考え方が。いろんなことを受け入れるっていうか。何か、変わった。視野が広がって……。

Cさん母：それは感じますね。視野が広がった。例えば、私がちょっと偏見の目で見たりすると、「いろんな人がいるんだよ、世界

には」っていう感じです。「そういう側面もあるかもしれないけど、他の側面で見たら、いい人かもよ」とか、いろいろ。「あ、そうだね」っていう感じです。

Cさん：そうそう。

Cさんは高校で留学した際、ユダヤ系一家の住居にホームステイした。それ以前はユダヤ系の人に出会ったことはなく、「なんか危険な…でも勤勉で…」というイメージを漠然と持っていたという。しかし、実際に一家と寝食を共にする中で彼女は「実際行ってみたら考え方もすごいし、自分の宗教を全部学んで、全部それ通りに生きているのがすごい」と思うようになったという。こうした経験を通じて彼女は自分の偏見を修正し、「世界にはいろんな人がいる」という多文化主義的な視点を獲得したと考察できる。

Cさんはこうした能力を大学入試の際に有効活用した。英語力と海外経験を高く評価する学部を絞り、SATとTOEFLの点数を上げることに専念した。面接では幼少期のロサンゼルスでの経験と高校時の留学の話をした。大学入学後はビジネスホテルでアルバイトを始め、海外の客相手に英語を使用する機会も多い。将来の就職に向けてどのように「グローバル型能力」を活用していくかはまだ定かではないが、英語を活かすことができ、日本と海外をつなぐ仕事に就きたいと考えている。

Dさんもまた英検1級とTOEIC970点、TOEFL110点を取得しており、自分の英語力については強い自信をもっている。彼は「帰国生イコール英語みたいな、そういう固定概念がある」ことを認識しており、「そういう固定概念はあんまりよくないと思うんですけど、僕は話せるんで期待されたらそれに応えるみたいな」と言う。

一方で、Dさんは海外生活で得た力は英語

力だけに限定されないことを強調して次のように語った。

—海外生活を送ったからこそ得られた能力、自分の言葉で言うとしたら何だと思う？

Dさん：やっぱりコミュニケーション、あとはフレキシブルな考え方じゃないですか。英語は、ぶっちゃけ、日本にいても勉強とか外人の友達をつくれればできるかなと思いますし、向こうの環境だからこそ得られたものではあるかなと思います。

—コミュニケーションっていうのは、いろんな人と関わりを持つっていうこと？

Dさん：そうです。僕は、この人は何人だからこうだっていう偏見とかはあんまりないですし、とりあえず話してみないと、その人がどういう人なのかも分かんないんで、ステレオタイプじゃないですけど、そういう偏見とか固定概念っていうのはないです。多分日本にいたら（偏見が）できちゃったのかなっていうのはあります。

筆者はロサンゼルス滞在中の調査においてDさんが小学生のころから人種や国籍に関わらず幅広い交友関係を築き、高い「社交力」や「順応力」を発揮しているのを見てきた。Dさんはそうしたロサンゼルスでの経験を振り返り、「アメリカへ行っていなかったら、結構そこら辺にいる普通の日本の学生と同じだったのかな」と話し、いろいろな文化的背景の人たちがいることが当たり前の中環境の中にいたことによって、「コミュニケーション（力）」「偏見とか固定概念っていうのがない…フレキシブルな考え方」を獲得したと語る。

さらに、Dさんは高校生の終わりに20歳以下を対象とした『TEDトーク』に出演したことがあるが、そこでは自身の「自己表現力（self-expression）」をテーマにプレゼンテーシ

ョンした。筆者はその映像を見たが、15分あまりのトークの中でDさんは9歳の時に渡米し、全く英語がわからない中で自分の意思を伝えようと試行錯誤したこと、そしてダンスを「自己表現」の手段として役立てたことを熱っぽく語っていた。

Dさんもまた、自分が海外で獲得した能力を活用することに積極的な姿勢を示した。大学入試においては、自分の海外経験を高く評価してくれるAO入試に照準を絞って予備校に通い、自己推薦文では海外で培った自身の「自己表現力」をアピールした。大学入学以降は、アメリカのダンスイベント会社の通訳を務めている。また、前述のスタンフォード大学の教授と交流を続け、彼が来日した際は高校時代に通った予備校で高校生を対象とした講演会を開催し成功をおさめた。Dさんは「(将来の仕事として)日本とアメリカをつなげようとは思わない」と話すが、実際は自分の能力を活かして通訳やコーディネーターとして日米の社会や人を結ぶ活動を活発に行っている。

5.3 国際移動志向と「グローバル型能力」の変容過程

CさんとDさんに共通していることは、これら自身が帰国後も海外とのトランスナショナルなつながりを構築・維持し、海外で獲得した能力を伸長していったという経緯である。

Cさんの場合は、高校時代の留学経験が大きな転機となった。それ以前の彼女は、前出のAさんBさん同様、日本の学校生活に順調に適応し、ロサンゼルスでの記憶や繋がりが弱くなるに伴って「日本人化」が進んでいた。帰国後3年目、彼女が中学1年生の時に行ったインタビューにおいて、母親はCさんが「すっかり日本人になった」と語っていた。当時のCさんは、テニスの部活動に打ち込んでおり、夏休み中はほぼ毎日練習に行っていた。彼女は英語

を話したくなることはない」と話し、ロサンゼルスにまた行きたいと思うかという質問に対しては、「思う、けど旅行でいいかな」と答えた。もし彼女が中学高校を通じて日本にとどまっていたら、彼女の国際移動志向はAさんやBさんのように後退していったかもしれない。しかし、中学3年生でテニス部を引退したことによって「時間があまりすぎる」状態になり、そのようなときに「友達が留学に行くって聞いて、あ、いいなと思って、行きたいと思った」。

高校留学を通じてCさんの国際移動志向と海外で獲得した能力はさまざまな点で向上したといえる。まず、前述のようにアメリカ以外の国への国際移動を積極的に考慮するようになった。能力に関しては、英語力が飛躍的に向上しただけでなく、5年生の帰国時には意識しなかった多文化主義的なまなざしを獲得することができた。

——偏見とか差別とかかっていうことの意味するものは、やっぱり高校のとき留学して分かった？

Cさん：アメリカ人と日本人、アジア人と白人みたいな、小学校のときはあんまり気にしなかったです。

——文化の違いが面白いっていう意識は、4年生で帰ってきたときはあんまりなかった？

Cさん：うん、ない。意識はしていなかった。

Cさん母：子どもだったんだと思うんですよ、やっぱり、ちっちゃいときは

ロサンゼルスで獲得した「グローバル型能力」の芽は日本の学校生活の中で埋もれつつあったといえる。しかし、高校留学を通じて彼女は文化の違いを意識化し、「広い視野」といったような言葉で自分のもつ能力を説明できるようになっていた。

Dさんの場合は、高校や予備校においてト

ランスナショナルな実践に従事する機会が多くあったことが、能力伸長に寄与したといえる。高校は帰国生が全生徒の3分の2を占めており、学校では日本語だけではなく英語やほかの外国語が飛び交っていた。Dさんは母校を「自由な学校」と評し、在学中は生徒会長としてアメリカの学校行事を取り入れた試みをたくさん手がけたと語る。

Dさん：Z校は結構自由な学校で、学校全体としてはできないんですけど、友達の誕生日とか、僕も生クリームを投げつけられました。生卵を投げつけたり、豆腐を投げつけたり。——やっぱり日本の普通の高校とは違いますね。

Dさん母：そうですね。向こうの学校行事をやりたくて、生徒会に立候補して、いろいろ……。

Dさん：個人的に、向こうの学校に自分も行ったかったんで、できるだけ向こうの学校に近付けたいっていうのがあって、生徒会にも立候補したんです。

Dさんは「アメリカの学校であった活動を日本でやろうかなと思って」様々な企画を立ち上げたが、そのプロジェクトの一つは、学校名のロゴが入ったTシャツを生徒がデザインし、販売することだった。ほぼ全生徒と教員が購入し、売上は全額募金したという。このように彼はアメリカの学校行事を日本の学校の中で再現することによって、日本にいながらにして記憶の中のアメリカとつながり続けていたといえる。

また、高校時代にアメリカの大学に体験入学する機会を得たことも、彼の国際移動志向や自分の「グローバル型能力」への自信を高めた。高校二年生のときに入った予備校ではスタンフォード大学で10日間学ぶスタディーツアーが企画されており、Dさんはその企画に飛びついた。プログラムを通じて「世界でも有数の大

学の教授たち」が親身になって指導してくれることに驚き、「アメリカと比べると日本の高校や大学は教授と生徒っていう立場が、どうしても境界線がある」ことを再確認したという。短期留学を通じて、彼はアメリカという外の視点から日本の学校教育を批判的にまなざす視点を深めたといえるだろう。

6. 考察と課題

本調査の対象者4名は全員が国内の難関私立大学に進学しており、その意味で海外渡航以前から長期にわたって家族が従事してきた教育戦略は一定の成功をおさめたといえる。一方、ライフコースという観点からみると、国際移動に消極的で日本に安住するケースと、国際移動に積極的で将来的にも海外と関わりを維持し続けるケースに分岐する可能性が示唆された。こうしたライフコース選択の差異は、かれらが海外で培った能力の帰国後の変容と関係していると考えられる。

国内安住志向の若者たちに特徴的なのは、大学生になったかれらが海外で培った能力を「英語力しかない」と限定的にとらえている点である。インタビューにおいて、かれらからロサンゼルス滞在時において見出された「社交力」や「順応力」といった能力に関する語りを引き出すことはできなかった。むしろ、かれらは「グローバル型能力」として筆者が想定した能力を今は持っていないと否定する発言を繰り返していた。さらに、かれらは英語力を「帰国生」であることの拠り所であり、地位達成の有用な武器になると捉えていたが、その英語力に関しても「(滞在時と比べて)落ちてきている」と自信を失っている様子がみられた。このように、かれらは英語力をはじめとする、一般的に帰国生に期待される能力の後退・消失を強く認識しており、その過程は彼らの「日本人化」意識の高まりを伴って生起していた。そうした意識の

変化の中で、かれらは「グローバル型能力」が要求されるグローバルなフィールドに再び出ること強い不安を抱くようになっていた。かれらは英語力を活用して国内で地位達成を遂げたことに充足しているものであり、現在得た地位が脅かされるリスクを背負ってまで国際移動することに魅力を感じていないのである。

これに対して国際移動志向の若者たちに特徴的なのは英語力に矮小化されない自身の「グローバル型能力」について多くを語っていた点である。「海外生活を通じて得た能力はなにか」という筆者の質問に対してかれらは即座に「なんとかなる精神」「いろいろな考え方を受け入れる」「視野の広さ」「コミュニケーション力」「フレキシブルな考え方」「自己表現力」などと答えており、そうした能力に自信を持っている様子がうかがえた。国内安住志向の若者たちが示した「日本人化」の意識は弱く、むしろ自分と「普通の日本人」を差異化するものが英語力を含む「グローバル型能力」であると考えていた。かれらはその能力をロサンゼルスから帰国した後も維持・伸長できたと考えており、そうした自信がその能力を活用したいという積極性に結びついているといえる。そして英語力だけに限定されない「グローバル型能力」を活用できる場所として、グローバルなフィールドに強い関心を抱き、国際移動に意欲的になっていると考えられる。

ではこうしたライフコースおよび自己の「グローバル型能力」の評価に関する分岐は、どのようにして発生するのだろうか。国内安住志向の若者と国際移動志向の若者の再適応過程を比較すると、①日本の学校生活における「グローバル型能力」の矮小化、②トランスナショナルな経験を通じた「グローバル型能力」更新・伸長の機会獲得、という異なる水路づげが見出される。

まず、AさんとBさんの場合は、中学受験

を経て私立の中高一貫校に入学した。いずれも難関大学への進学実績を誇る偏差値の高い進学校である。かれらはそこで「勉強勉強の毎日」「早慶上智はあたりまえ」とする学校文化の中で6年間を過ごした。巖根（1987）は帰国生が東京大学を頂点とした学歴社会の上層に位置づくことを家庭から期待されていることに言及したが、近年のグローバル人材政策の中で、帰国生が学歴エリートとして「グローバルな活躍を遂げる」ことに対する親や学校からの期待は一層高まっており、帰国生自身もその期待を強く感じている。そして、国内の学歴獲得競争において重視される能力は従来の教科中心の学力、特に英語であるという現状が続いている。北村（2015）は、「今日では、さすがに『英語の使い手＝グローバル人材』といった安易なステレオタイプ化は影を潜めつつあるが、いまだにそれに近い発想が日本社会の中に根強いこともまた事実である」（p.12）と述べているが、国内有名大学への進学実績を重視する学校の中では、帰国生が海外で培ったさまざまな「グローバル型能力」を英語のみに矮小化するまなざしや教育実践が支配的であると考えられる⁵⁾。また、竹内（1995）によれば日本の学歴獲得競争において上位に位置づくためには「文化資本としての日本人らしさ」が必要である。AさんとBさんの学校は帰国生受け入れ校であり、帰国生の異文化を削ぎ取るようなあからさまな同化圧力はなかったと考えられるが、国内の学歴エリートに成長していく過程の中でかれらは意識的・無意識的に「順調に日本人になってきている（Aさん）」と考察できる。

一方、国際移動志向をもつCさんとDさんも帰国生受け入れ校のある有名私立校に進学しており、かれらが国内の学歴獲得競争と無縁であったわけではない。しかし、かれらはその競争に参加しつつも、トランスナショナルな経験を主体的に模索し、英語力だけにとらわれない

「グローバル型能力」を更新・伸長する機会を得ていた点が大きく異なる。そのひとつが、高校在学中の留学である。Cさんは1年間、Dさんは10日間のアメリカ滞在であったが、この経験はあらためて日本の学校や社会を日本の外から批判的にまなざす視座をかれらに与え、国際移動への動機づけを高めていた。特に10歳で帰国したCさんにとっては海外で培った自分の能力をあらためて意識して言語化する契機になったといえる。また、Dさんの事例からは、トランスナショナルな経験を呼び込む「自由」が学校の中に存在することにより、「グローバル型能力」の伸長が促されることを指摘できる。重要なことは彼自身が生徒会長として率先してアメリカの行事や考え方を日本の学校の中に「輸入」し、学校文化を海外に開かれたものに作り替えている点である。その過程で彼や彼の周りの生徒たちは日本の受験競争における能力観に縛られず、「フレキシブルな考え方」をはじめとする「グローバル型能力」に意識的になり、それを積極的に伸長していったと考えられる。

以上の考察からは、日本が「グローバル人材」の育成をめざすにあたって直面している教育的課題が浮かびあがってくる。吉田(2014)は高等教育を中心とするグローバル人材政策を分析する中で、「グローバル人材とは、結局のところ海外留学経験があり英語が話せる者であり、これは欧米へのキャッチアップを目指して国際化を議論していたことと何ら変わりはない」と批判する(p.36)。この指摘は、初等中等教育に関してもあてはまる。子どもたちが海外で培ったさまざまな能力は、従来の学歴獲得競争の中で「英語力」に矮小化されて育成がはかられており、海外から日本を批判的にまなざす視座を育てたり、海外との繋がりの中で日本に生活する自分の立ち位置を再認識する経験は、帰国生受け入れ校においてすら少ない。むしろ、学

歴エリートであることを求められる帰国生を受け入れる進学校であるからこそ、進学実績に直接的にかかわる英語力の強化にのみ多大な関心が払われていることも否めないだろう。こうした学校文化は、帰国生を日本国内のローカルな能力観に縛りつけ、英語力だけでは地位達成の「武器」にならないグローバルな文脈に参入することを帰国生たちに躊躇させてしまっている。

帰国生が海外で培った能力を活かしてグローバルな課題に取り組む人材に育っていくためには、英語力の育成に特化したグローバル人材育成政策や、それにもとづく学校教育のとりくみや入試の評価基準を再検討する必要がある。今回取り上げたCさんとDさんの事例からは、初等中等教育の中に子どもたちがトランスナショナルな経験に従事できる契機を増やしていくことの重要性が示唆される。帰国生自身が単身留学や諸外国の学校との交流の機会を利用して、人と人とのかかわりの中で自分が海外とつながっていることを認識し、幼少期の海外経験で培った能力を捉えなおして更新していくことが必要であろう。こうした経験を通じて、かれらの中に日本と海外をつなぎたい、または国にこだわることなくグローバルな活動に従事したいという主体性が育っていくことが期待される。

本研究の特長は7~8年間のスパンで特定の個人を追跡調査し、海外経験と帰国後の再適応経験が個人の能力や青年期のライフコースに及ぼす長期的影響を明らかにした点にある。しかし、サンプル数が少ないため今回得た知見は帰国生のリアリティの一端を捉えたにすぎない。同じ地域から帰国しても、滞在年数、帰国時年齢や帰国後の学校経験によって、「グローバル型能力」の変容過程や国際志向性は異なることが予想される。今後は対象者を増やすことによって、青年期の帰国生が選択するライフコースの多様性を明らかにしていきたいと考えている。

注

- (1) たとえば経済団体連合会における意見書『グローバル化時代の人材育成について』(2000)の中で、帰国生は「豊かな海外経験を持ち、我が国と海外とのネットワーク強化に貢献する貴重な人材」と言及されている。
- (2) 箕浦(1988)は調査を行ったロサンゼルス地域から帰国した子どもたちを10年間にわたって複数回インタビューしており、異文化体験が帰国生のアイデンティティに及ぼす長期的効果を分析している。しかし、箕浦が問題としたのは、「社会化過程で身につけた在外地の文化と自国の文化の二つの意味体系の狭間」における帰国生の葛藤や「自分自身の意味空間の構築」であり(pp. 3-4)、「能力」という観点からの変容を辿っているわけではない。
- (3) この4名のうち筆者はBさんの母と親しい付き合いを続けており、BさんがAさん、Cさんの母と親しいことから連絡を取ってもらうなどして追跡インタビューをすることができた。またDさんと彼の母親とはロサンゼルス滞在時に交流が深く、帰国後の母子インタビューはfacebookでDさん本人と連絡をとりあって実現した。
- (4) 「グローバル型能力」として、英語力、第二外国語力、多角的な視野、文化や相手に応じて言語や文化的態度をスイッチする力、文化や国籍が異なる相手と親しくなる力、マイノリティに対する理解力と寛容力、困難に際して前向きに立ち向かう力、場の空気を読んで相手に合わせる力、自分から積極的に行動する力、を挙げ、それらについてどのレベルであるかを「まったく高くない」～「とても高い」の4段階で自己評価してもらった。
- (5) 佐藤ほか(2011)は、20代、30代、40代の帰国生をインタビュー調査している。その結果、帰国生自身や保護者、教員の間で帰国生と英語を強く結びつける意識が強く、帰国生自身が英語力への関心をむげざるをえなくなっていることを示唆している。

参考文献

岡村郁子(2008)「帰国生の受け入れクラスに対する意識—受け入れ形態の差異に着目して」『異文化間教育』第28号, pp. 110-113.

岡村郁子(2010)「「帰国体験を活かす」ことに対する意識とその形成要因について—帰国体験を持つ大学生へのインタビュー調査の分析から—」『国際教育評論』第8号, pp. 27-43.

岡村郁子(2013a)「海外経験によって得られた帰国高校生の特性とその関連要因—属性と家庭および在籍校によるサポートとの関連から—」『異文化間教育』第38号, pp. 116-29.

岡村郁子(2013b)「帰国高校生の「帰国体験を活かす」ことに対する意識とその関連要因—キャリアとしての帰国経験の検討—」『人文科学研究』第9号, pp. 145-56.

北村友人(2015)「グローバル・シティズンシップ教育をめぐる議論の潮流」『異文化間教育』第42号, pp. 1-14.

グッドマン, ロジャー(1992) 長島信弘・清水郷美訳『帰国子女—新しい特権階級の出現』岩波書店。

グローバル人材育成委員会(2010)『産学官でグローバル人材の育成を』。

経済団体連合会(2010)『グローバル化時代の人材育成について』。

小島勝(1987)「帰国子女の「追跡研究」の意義と問題—最近の研究にもとづいて—」『異文化間教育』第1号, pp. 115-26.

佐藤那衛(2001)『国際理解教育—多文化共生社会の学校づくり』明石書店。

佐藤那衛ほか(2011)「帰国児童・生徒教育に関する総合的な調査研究—報告書概要」『海外子女研究』2011年5月号, pp. 15-25.

渋谷真樹(2001)『「帰国子女」の位置取りの政治—帰国子女教育学級の差異のエスノグラフィー』勁草書房。

竹田美和(2013)『グローバル化と子どもの社会化—帰国子女・ダブルスの国際移動と多文化共生—』学文社。

竹内洋(1995)『日本のメリトクラシー—構造と心性』東京大学出版会。

額賀美紗子(2013)『越境する日本人家族と教育—「グローバル型能力」育成の葛藤』勁草書房。

巽岩ナオミ(1986)「「海外成長日本人」の適応における内部葛藤—ライフヒストリーによる研究から—」『異文化間教育』第1号, pp. 67-80.

箕浦康子(1988)「日本帰国後の海外体験の心理的再編成過程—帰国者への象徴的相互作用論アプローチ—」『社会心理学研究』第3号2巻, pp. 3-11.

横田雅弘・小林明編(2013)『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社。

吉田文(2014)「「グローバル人材の育成」と日本の大学教育—議論のローカリズムをめぐる—」『教育学研究』第81号2巻, pp. 164-75.

Transformation of 'Global Competences' in Returnees' Re-adaptation Processes in Japan:
– Divergence of Orientation toward Local Settlement and Global Migration –

Misako NUKAGA (Wako University)

Abstract

In the late 2000s, the Japanese government launched a 'Project for Promotion of Global Human Resource Development', in which returnee youths are perceived as potential 'global talents'. This study investigates how 'global competences' and global orientation among returnees change over time after returning to Japan. It focuses particularly on re-adaptation processes of returnees who were raised under parents' transnational education strategies aiming at cultivating children's 'global competences'.

Based on 7 years of multiple follow-up interviews with four returnees from Los Angeles who currently enroll in high-ranked universities, the study finds that the returnees' life trajectories diverge into two patterns: one in which 'global competences' are nurtured and global orientations are increased, and other in which 'global competences' are narrowly defined and orientations toward local settlement are heightened. Returnees who show orientation toward local settlement perceive that skill in English is the only competence that they acquired abroad and demonstrate hesitancy toward going overseas where other 'global competences' are required. On the other hand, returnees who show orientation toward global migration display confidence not only with respect to English skills but also with respect to other 'global competences'. Such confidence increases their motivation to engage in a global field where 'global competences' are highly valued and can be taken advantage of. The divergence results from their different re-adaptation processes: 1) one in which narrowly defined 'global competences' are internalized at school, and 2) one in which opportunities to renew and nurture their 'global competences' are provided through various transnational experiences.

These findings suggest the need to rethink current policies of the project for 'Promotion of Global Human Resource Development' that put heavy weight on nurturing English skills. The study also suggests the need to increase opportunities for transnational experiences such as study abroad programs and exchanges with schools overseas in elementary and secondary years.

Key Words : returnee college students, global competences, global orientation, transnational experiences, follow-up research